This copy has been provided by the UBC Archives [or UBC Rare Books and Special Collections] and is to be used solely for research or private study.

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
8-3

PLEASE RETAIN
ORIGINAL ORDER

VIII.4

Sept 26

雜錄

農業界の先達 故井上次郎氏

梅月生

ウィニペッグでは、元ヘネー村在住者によつて、故井上次郎氏二十三周年記念會が十月三日の晩に開かれる。

井上次郎氏といえば、もと前後から以上の人であつたら誰でも知つている筈である。

ピーシー州沿岸日系人の活動の天地が晩香坡市内や沿岸の木材産業と漁業に限られていた時代に、そして日本人移民多數が渡航してカナダの勞働市場へなだれ込み勞働組合からの排撃をかもしつつあつた時代に、日本人が農業方面へ分布する必要があることを主張し、自からも筆をすてて地にはいり、後年のフレザー・ヴアレー日本人農家發展の基いを開いたのが、故井上次郎氏だつたのである。

井上氏よりも先きに農地へ入つた人もあるそうだが、日本人の農地への分布を主張しこれを實現させたのは井上氏であり、今から考えれば、井上氏がもう一歩進んで、その抱負をカナダの東部にまで及ぼしたのであつたらば——とも言えるだろうが、それはあの當時の事情からして望む方が無理であろう。

何んにしても故井上次郎氏が『日本人農業界の先達』であることにまちがいはなく、氏自からは、草分けの農地に骨を埋めているのである。井上氏のことは、去る一九五〇年の春に書いたことがあるのでここでは略する。その代りに一九三七年十月十八日發行の『日刊民衆』に出た、ヘネーのエス・テー氏の『故柳蔭先生』(井上次郎氏七周年記念會のこと)という一文を記載することにする。

故「柳蔭」先生

井上さんが「柳蔭」という雅號を持つて居られた事を僕は今度初めて知つた。故人は元來蒲柳の質、根を起し土を掘る百姓をする人ではなかつた。赤川牧師の説教の一節にあの時代に井上さんは百姓にならずともカラーを附けて暮せるチャンスは幾らでもあつた筈である。易きをすてて至難の農業を始められたのは、同胞の前途を思うからであります。フレザー沿岸六百軒の同胞農者のためにイバラの道を開き前途の燈明となられたのです去る者は日々に疎しというのが現世の實情でありますが、私の知る範圍では、故鈴木悅氏と故井上次郎氏の二君だけは、一周年三周年更に七周年等々、皆さんが寄つて故人の記念會を催されるのは、どうした譯でありませうか。自分の事よりも、同胞一般のために不斷の努力を拂われた人であるからであります。聖書に『友のために紀す愛の最高なり』と記されてあります。

十月六日——秋晴れの好天氣、日中は暑いくらいだ。此の日、ヘネー農會主催の故井上次郎氏の七周記念會は催された。

午後二時三十分墓地參集、讃美歌の合唱、赤川牧師の祈禱、記念の撮影、寫眞師はヘネー語學校々長有賀君であつた。

二時半、農會ホールに於て赤川牧師司式の下に記念會が開催さる。古賀農會長、庄司君、吉野君の思出話或は感想山家君の故人の事績講演、吉野夫人の獨唱、赤川牧師の説教後、最後に井手律氏の遺族代表の謝辭を以て終り、階下でヘネー婦人會斡旋の茶菓で再び故人を語り散會せるは日沒であつた。

此の日、場内の正面に紅葉を飾れる中に、故人の擴大寫眞がかかげられ、眞に生けるが如し。我等は久し振りに懷かしき人の面影に接したるの感を持つた。兩壁には大谷老の筆になる故人の最後にものせる詩と句が掲げられてある

紅血自殺　頭髏八寸
是生是死　秋雨不斷
陽炎の生きんとすれど秋の雨

故人の晩年は淋しかつた。痛々しかつた。故人もまた十字架を負わる者であつた。同胞農者の爲めに最善を盡せるも、現世の苦難を逃れる事は出來なかつた。事志と違い、ピー・ピー・ヂー會社の倒壞は如何に故人を苦しめたであろうか。ひしひしと迫る責任は故人の壽命を十年は縮めた。だが然しながら、我等は何も知らず「神のみ凡てを知り給う。」故人の苦闘、あの蒲柳の體質を以て血みどろの奮闘は、同胞農村建設の基石であつたのだ。我等は一切を清算して、故人の志しに感銘するのである。

フオラム 投稿歓迎

高山氏に同感

オ州　子

十六日付記事、高山さんの日語校に就て——は私も同感であります。高山さんのフォラムに同感されない讀者は少いでしよう。日本人である以上日本語は必要です。行過ぎな考には捨てたいものです。

9/26/53

YAMAGA YASUTARO PAPERS
FOLDER NO. 8-3